アイサップ ニュースレター

第７号

2009 年 3 月 15 日発行

ISAPH はラオスとマラウイの母親と子どもたちの保健の向上を支援しています

NPO International Support and Partnership for Health

写真：成長モニタリングで赤ちゃんの体重を測定

ラオスで第 2 フェーズの活動を開始しました

ラオスにおける活動の第 1 フェーズでは、2005 年 5 月より 3 年間にわたり、カムアン県セバンファイ郡において妊婦と乳幼児の健康を中心に住民自ら健康増進を心がけるよう VHV（保健ボランティア）を中心とした住民参加による保健活動を実施してきました。この活動によって、健康の指標となる情報収集ができるような体制やヘルスセンター職員、郡保健局スタッフによる支援体制が整備されてきました。

これを踏まえて、第 2 フェーズでは引き続き、カムアン県のシーブンフアン、カンペータイ、カシの 3 地区をモデル地区とし、「地域母子保健プロジェクト」をテーマに活動を実施することになりました。このカムアン県の 3 地区では、①郡保健局による成長モニタリング及び移動診療の実施計画、②郡保健局職員、ヘルスセンター職員および VHV への母子保健と健康教育の技術向上に関するトレーニング支援、③成長モニタリングや住民へのモバイルクリニックの実施とそのモニタリング、の以上 3 点について 2008 年 10 月から 2011 年 12 月までの 3 年 2 ヵ月間の活動を行う計画です。

なお、第 2 フェーズでは、上記の活動に加えて JICA の草の根事業による「生き生き健康村づくり」プロジェクトを同時に開始しました。

（ISAPH 事務局担当　磯　東一郎）

第 2 フェーズ活動の MOU を締結

2008 年 5 月に、ISAPH の支援によるラオスの「地域母子保健プロジェクト」が終了し、母子の健康向上のための住民保健活動の基盤が整備されました。その一方、住民組織の強化、健康教育の方法・内容の改善なども今後の課題として残されています。これらの課題を踏まえて第 2 フェーズのプロジェクト案を作成し、それについて現地政府と協議を行いました。そして昨年 10 月 20 日、ラオス国タケク市において、ラオス保健省並びに外務省の承認を得て、ISAPH とラオス政府間における 2 回目の了解覚書（以下 MOU: Memorandum of Understanding）が締結されました。今回のプロジェクトは、カムアン県セバンファイ郡の 3 地域で活動が行われます。

ラオスのタケク市で行われた第 2 期プロジェクト実施に関する MOU 締結の署名式（2008 年 10 月 20 日）

第 2 フェーズのプロジェクトは、2 つの活動で構成されています。一つはこれまで実施してきた郡保健局と保健ボランティアのサポートによる住民保健活動の推進、もう一つは新規事業として、JICA（Japan International Cooperation Agency：独立行政法人国際協力機構）草の根技術協力事業パートナーシッププログラムの協力を得て、母子の栄養・衛生の改善をテーマとしたものです。

「生き生き健康村づくりプロジェクト」～ JICA 草の根技術協力事業～

JICA の草の根事業は、開発途上国への支援について一定の実績を有している NGO 団体等が、これまでの活動を通じて蓄積した経験や技術に基づいて提案するプロジェクトを JICA の資金的支援を得て行う活動です。

ラオスにおける JICA 草の根技術協力事業のプロジェクト名は「生き生き健康村づくりプロジェクト」で、昨年 12 月 24 日に契約が結ばれました。このプロジェクトではカムアン県セバンファイ郡のシーブンフアンという 1 地区に絞っての活動となり、12 月 24 日より 3 年間にわたって実施されます。この活動で、JICA より 1,800 万円の資金援助を受けることになります。

ラオスからの報告

ラオスにおける ISAPH の活動は、第 1 フェーズを終了し、現在、第 2 フェーズの活動を行っています。また、第 2 フェーズの活動の中心となる JICA 草の根技術協力事業である「生き生き健康村づくりプロジェクト」は開始されたばかりであり、まもなく、活動対象地域における活動前の状況を把握し、活動後の評価を行うためのベースラインサーベイを実施する予定です。この間、昨年の 6 月には、看護師ユニフォームの寄贈があったり、また、今年 1 月から 2 月にかけて、安全な水の確保という観点から水質検査を中心とした活動が行われました。さらに、今年度も、東京女子医大の学生さんたちによるスタディツアーに加えて、聖マリア病院のスタッフによるスタディツアーおよび臨床研修医のフィールド研修が実施されました。

聖マリア病院からラオス医療機関へ 看護師ユニフォームの寄贈

昨年 6 月、ISAPH を通じ、聖マリア病院が看護白衣一新の際に不要となった旧白衣をラオスのカムアン県立病院に 210 着、セバンファイ郡病院に 40 着の計 250 着（未使用約 60 着を含む）が寄贈されました。

県病院での白衣贈呈式の様子

今まで、現地の看護師さんは白衣の下に現地のスカート「シン」を着用していました。日本から送られたユニフォームは現地の看護師さんたちには M サイズでも大きめになってしまったのですが、幸い、現地の女性はもともと長いスカートであるシンをはいているため、大きめのものを好むようで、大きすぎるのが難になるということはありませんでした。

見た目新品同様のユニフォームに、看護師さんたちは興味津々で非常に喜んでいました。使い方のわからない中古の機器を寄贈するより、よほど実用的なのでは、というのが ISAPH スタッフの一致した意見でした。

贈呈された白衣を着て、病院前で記念撮影

6 月 30 日に両機関で贈呈式が行われ、カムアン県立病院では、病院関係者をはじめ、県保健局の関係者も参加され、県知事より感謝状が聖マリア病院と ISAPH に送られました。このニュースは現地の新聞にも掲載されました。

セバンファイ郡で井戸水の 水質調査を行いました

2009 年 1 月 21 日（水）から 2 月 6 日（金）の 16 日間、財団法人九州産業衛生協会の甲斐田照明氏（技術士：環境部門）にラオスのカムアン県セバンファイ郡の水質調査と指導をしていただきました。今回の調査の概要は以下のとおりです。

1）井戸水の大腸菌測定及び新検査方法の指導
2）新規井戸水ボーリング予定地区視察
3）ラオスカムアン県保健局水道課における飲料水適性検査方法の確認
4）緩速ろ過装置の試作

1)の井戸水の大腸菌検査については日本の新基準に基づきこれまで行ってきた試験紙による大腸

菌群の測定から、大腸菌を測定するECブルーを使っての測定方法に変更し、井戸水の大腸菌検査を行い、その報告を地域住民に行いました。また、今回の新測定法については、現地で実施できるよう、九州産業衛生協会環境科学センターより検査キットをご寄付いただき、ISAPH職員に指導していただきました。

水質検査を実施・指導している甲斐田専門家

次に、2) の新規井戸水ボーリング予定地区を視察しました。井戸の周りに家畜が近寄るとその糞尿によって細菌汚染がおき、さらに雨期になると泥水が井戸にしみ込みやすくなり、井戸水大腸菌に汚染される可能性が高くなります。それらの状況を確認するためです。

3) の飲料水適性検査方法の確認では、県保健局水道課を訪問し、分析方法を確認しました。その結果、カムアン県で実施可能な水質検査は12項目あり、その中で井戸を掘削する際に実施すべき水質検査は、基本的に健康に関連する項目です。ヒ素、マンガン、フッ素、大腸菌、硝酸、亜硝酸がこれに当たりますが、硝酸、亜硝酸については、可能性が低いと判断しています。

最後の 4) 緩速ろ過装置については、事務所前にバケツとホースと砂を用いて1日300リットルの緩速（生物）ろ過装置を製作しました。泥水を2回の前ろ過と本ろ過を行うことで、最終的には透視度50㎝以上の精製水になりました。

ラオスでの活動を終えて

2006年8月からISAPH Laosの活動に参加し、昨年7月に2年間の任期が終わり帰国しました。現在は、外科病棟の看護師として働いていますが、ラオスにいた頃に比べると3倍くらいのスピードで毎日が過ぎ去っている気がします。

ISAPH Laosでは主に村落部での母子保健活動ということで、地元の医療従事者とともに村を巡回しながら子どもたちの身体計測や予防接種、妊産婦健診、一般診療などを行ってきました。活動は村人たちの農作業の時間とずらして行うため、夕方に村へ行き夜8時頃から健康教育を実施、そのまま村長さんの自宅に泊めてもらって、翌朝5時頃から実際に子どもたちの身体測定などの活動を実施していました。そして村人たちは朝7時には農作業に出かけていきます。私たちは夕方また別の村へ移動するのですが、その間、空いた時間に夕飯にする魚を取ったり山菜を取りに行ったり木陰で昼寝をしたりという生活でした。

村には電気も水道ももちろんガスもなく、村長さんの家では水汲みをしたり薪で火を熾して食事の準備を手伝ったりと日本ではできないような経験もしました。活動もどうにか軌道に乗ってきて、乳児死亡率の低下など徐々に成果が見え始めています。私は日本に帰国し新しい職場で働いていますが、今後もラオスでのISAPHの活動見守っていきたいと考えています。

（ISAPH Laos　篠原久美子）

ラオスのナショナルスタッフ紹介

私の名前はブンコン・インティラートです。サワナケット県のタパントン郡のターペー村で1974年3月5日に生まれました。上級中学校を終えた1995年から2001年までラオス国立大学医科学部で医師になる勉強をしました。その後、ビエンチャンのマホソット病院の感染症 / 熱帯医学科でボランティアとして働きました。ラオス国立大学医科学部は卒後教育と調査をする新しい部門を設立しました。私はこの新しい部門で1年ボランティアとして働きました。その後、ラオスで活動する異なる国際NGOに就職し、ラオスの北部から南部のいろいろなところで働きました。私の業務は健康と栄養についてでした。以上が私の紹介です。もっと私のことをお知りになりたければどうぞご連絡ください。（ブンコンさんはISAPH現地職員のまとめ役および岩田プロジェクトマネジャーの補佐をしています。まだISAPHに来て長くはないですが、村での健康教育活動では普段とは異なる活発さで力量発揮中です。）

ISAPH では人材育成を重視しています

ISAPH では活動の一環として、人材育成を重要課題と考えています。例年、東京女子医大の学生によるスタディツアーに協力するとともに、聖マリア病院スタッフのスタディツアーや聖マリア病院臨床研修医のフィールド研修を支援してきました。以下は、聖マリア病院スタッフと臨床研修医の感想文です。

ラオス国スタディツアーの経験

今回のスタディツアーでは、ラオス国での看護師の現状を肌で感じることができた。県病院や郡病院においては、患者が入院すると患者の世話のために家族で病院に住んでいるような状況で、病院の敷地内には村から一緒に連れてきた家畜が数多くいた。

ラオス国の医療の主な担い手として看護職の役割は大きく、特に地方に行くにつれ、その業務範囲は拡大し、ヘルスセンターでは准看護師が診断、処方、お産の介助まで行っている現状であった。

コクトーン村で成長モニタリングの説明を聞いているツアーの参加者たち

マホソット病院で ICU を案内してくれた看護師は、日本での研修の経験もあり上手な日本語で案内してくれた。まだまだ学びたいとやる気に満ち溢れていた。他国の支援が必要な現状のなか、国際協力の支援と彼女たちのやる気で大きく成長していってほしい国だと感じた。

最後に、聖マリア病院の旧白衣が、今回見学した県病院と郡病院に寄贈されており、「私の白衣を着た看護師に会えるのでは」と期待していた。残念ながら私の白衣を着た看護師には会うことはできなかったが、郡病院で LL サイズの旧白衣を着たスタッフと交流でき嬉しく感じた。（聖母 4 階病棟　古賀さとみ）

ラオスフィールド研修を終えて

私は国際保健コース研修の一環として、2 月 10 日～ 19 日までラオスでのフィールド研修を行いました。

ラオスは東南アジアのインドシナ半島に位置する、人口約 560 万人、日本の本州程度の内陸国で、アジアの最貧国の一つです。このため保健衛生分野でも予算がなく、多くの国や国際機関、NGO から援助を受け、母子保健活動や医療活動を何とか行っています。しかし、その援助活動にも地域格差があり、首都ビェンチャンや世界遺産がある地区など世界的に名の知られた一部の地域に援助が集中しており、それ以外の地域には援助が十分に行き渡らない状態です。実際、外国の支援で立派な病院が建った地域もある中、私が訪れた郡の病院では滅菌用のオートクレーブすらなく、オーブンで器具を加熱し滅菌の代わりにしている状態でした。

今回私は ISAPH が活動を行っているカムアン県の小さな村で予防接種に関する調査を行いました。ISAPH は限られた資金ながら、郡・県保健局や各村長と協力し、現地の文化や教育レベル、言語、習慣に合わせた援助活動を行っていました。今回調査活動を行ったのは貧困率が高く教育レベルも低い地域であり、住民は自分の年齢を把握しておらず、子供の年齢も自立歩行が可能かどうかで 1 歳を超えているかを判断したりしていました。また民族の違いからラオスの公用語が十分に通じない住民もいるなど、保健衛生指導を行う上で多くの障害のある地域でした。それにも関わらず、今回調査を行った家庭の子供全員が 5 種類の予防接種を抜けなく受けていました。村によっては、依然として予防接種率が低いところもあり、現在も予防接種率向上に向けて対策を行っているとのことでしたが、ISAPH の活動が実を結んでいることが分かりました。大きな資金だけが大事なのではなく現地の文化や教育レベル、言語、習慣を知り、それに合わせた援助活動を行うのがいかに大切か学ぶことができました。

県保健局 EPI（拡大予防接種計画）課での調査

（研修医 2 年　安徳喜文）

ラオスってどんな国？（3）

村落部の日常生活

ISAPH Laos 駐在職員になって長くなりますが、活動地区が日帰り可能なので残念ながら村落部に泊まることはありません。そこで、青年海外協力隊（JOCV）時代にルアンパバーン県の村落でホームステイしていた時の事を書きます。

村落部では電気・水道・ガスは普及していません。なので、村人は日の出と共に起き日が沈んだら寝ます。

子どもたちが遊んでいる村の風景

朝4時、お寺の鐘と太鼓の音（日本のようにゴ～ンなんてものではなくほとんどドラム演奏）と共に起床。一気に周辺は人が動き出す気配。眠ってなどいられません。男性は川へ魚を捕りに行き、女性と子供は家の周辺の掃き掃除や川または井戸へ水汲みに行きます。

あっという間に周囲は明るくなり、お腹がすいている人は夜ご飯の残り物を食べ、そうでない人は朝食抜き（朝食の習慣はあまりない）、疲れたと思う暇もなく畑仕事へ。私は、看護学生と共に村落部での保健実習が目的だったため、小学生相手に衛生教育など行っていましたが、村人は夕方まで畑仕事に行って帰って来ませんでした。時間、時間での食事の習慣はなく（時計がない）お腹がすいた時が食事時です。

村落部の住居が高床式なのは、川が頻繁に氾濫するので、大雨でも浸水しない昔ながらの知恵？

川水には注意が必要

暗くなる前に川で水浴び。上流からお坊さんの水浴び→一般人の水汲み→野菜洗い→歯磨き→水浴び→洗濯の順になんとなく決まっているようでした。その更に上流にはやはり村があり、そこでも人々は川を使って生活しているが…。そして、もちろん水牛も水浴びしたり排泄したりしているが…。（そして私のお腹には寄生虫が住み着いた。水は沸かして飲んだ。しかし…。川で洗った生野菜を食べてはいけません！）

川は、乾季になると水かさが減るので崖の下になる。村人はその崖を、桶を担いでスイスイ登る。

強風がやむためのおまじない

その日は夕方から風が強く家が飛んでしまうのでは？などと心配していたら辺りから「バーン・バーン」と花火のような音が…。村人が猟銃（空砲）を空に向かって打っている。拳銃の音なんて聞いたことがなかったので、何だろうと外をのぞこうとして、同僚に「たまに間違って空砲じゃないことがあるから家の中にいなさい。」と止められた。何でも強風がやむためのおまじない（？）らしい。

夕食の片付けは暗くなってできないので、翌朝に回して、就寝。隠し持っていた時計を見たら8時でした。

寝る前に見た星空は、今までに見たこともない美しさでした。口をぽかんと開けてみているのは私だけで、みんなは何が珍しいのか不思議がっていました。

（ISAPH Laos 篠原久美子）

ムジンゲコミュニティ・プロジェクトからの報告

平成 20 年 9 月に現地の連絡係をしてくれているチャリティーさんから以下のような報告がありました。

“ムジンゲ村は 8 月に訪問しました。県病院長が転勤前に予算の一部をムジンゲのために使用できるようしてくれたために、保健施設の最小単位であるヘルスポストとその村で保健活動をしている政府の職員であるヘルス・サーベイランス・アシスタント（以下、HSA）の家が完成しました。なお以前に建設されたトイレのひとつはそのままありました。

新しく建てられた HSA の家

現在ヘルスポストで実施している活動は以下の通りです。

1）結核検査のための喀痰塗沫標本を県病院へ提出（HSA が喀痰塗沫標本を作成し、県病院の救急車を呼び、標本を提出する）

2）近隣のヘルスセンターの協力を得て、5 歳未満児の診療（under 5 clinic）を開催。以前は 50 人くらいの参加者でしたが、現在 220 人に増加。診療では体重測定、栄養失調児の把握、予防接種を実施している

3）地域のボランティアの協力により HIV 検査についての意識向上のための講話会を開催

4）家族計画の実施

5）マラリア対策のための薬剤浸漬された蚊帳の配布

6）治療薬（鎮痛剤、ペニシリン、経口補水塩）の保管と配布

7）2 つの村で医薬品回転システムを実施

なお、懸案事項として、トイレを男女別にするために、もう一つトイレをつくることが必要です。

現在 1 つしかないトイレ

村人からの理解と協力が得られてプロジェクト活動はゆっくりですが進んでいます。今後も村人のオーナーシップを損なわないような支援をしていきたいと思っていますので、皆様のご理解ご協力を賜りますようお願い申し上げます。”

マラウイのムジンゲ地区では、ISAPH の支援により、活発なプライマリヘルスケア活動を自発的に行っています。近く、ISAPH から現地を視察・訪問し、今後の支援活動について協議する予定です。（ISAPH 齋藤智子）

ISAPH 新スタッフの自己紹介

皆様はじめまして。大阪出身の藤倉友と申します。

2004 年からの約 2 年間カンボジアに滞在していた折、途上国における医療の大切さを痛感させられる場面に何度も遭遇しました。それを機に、神戸大学の国際協力研究科にて国際医療保健を専攻し、文系出身であっても国際保健に携われる機会を求めておりました。この度、ISAPH で働く機会をいただき、大変嬉しく思っています。ラオスも医療分野も初心者ですが、熱い心と冷たい頭を持って（by 緒方貞子さん）、精一杯頑張りたいと思います。どうぞよろしくお願いいたします。

ISAPH の歩み

2008 年 4 月～ 2009 年 3 月

- 2008 年 5 月 12 日
  第一期プロジェクト終了
- 5 月 31 日
  平成 20 年度 ISAPH 総会・理事会を開催
- 8 月 17 日～ 24 日
  東京女子医大の「ラオス国スタディツアー」を受け入れ
- 10 月 20 日
  ラオス政府と第二期プロジェクの Memorandum of Understanding（MOU）を締結
- 11 月 16 日～ 21 日
  聖マリア病院職員を対象とした「ラオス国スタディツアー」を受け入れ
- 12 月 24 日
  「JICA 草の根協力事業：生き生き健康村づくりプロジェクト（ラオス）」の開始
- 2009 年 1 月 21 日～ 2 月 6 日
  九州産業衛生協会の甲斐田照明氏が水質調査と指導のためラオスに派遣
- 2 月 10 日～ 19 日
  聖マリア病院臨床研修プログラム「国際保健コース」のフィールド研修を受け入れ（ラオス）
- 2 月 22 日～ 3 月 5 日
  聖マリア病院杉本孝生氏がプロジェクト運営管理のためラオスに派遣
- 3 月 8 日～ 14 日
  東京女子医大の「ラオス国スタディツアー」を受け入れ

ISAPH の役員名簿

役 職	氏 名	備 考
理事長	小早川隆敏	東京女子医科大学教授
理 事	深見 保正	元福岡県企業管理者
理 事	湯川 武	慶應義塾大学商学部教授
理 事	樋口 敬記	内山緑地建設株式会社会長
理 事	浦部 大策	聖マリア病院国際事業部
監 事	竹之下義弘	弁護士（東京六本木法律事務所）

お 礼

（財）九州産業衛生協会の高山毅氏より 2 月 13 日に寄付 10 万円を頂きました。

入会と寄付のお願い

ISAPH の活動を発展させるために、一人でも多くのご入会、ご寄付をお待ちしております。

法人会員

入会　30,000 円　年会費　30,000 円

一般会員

入会金　3,000 円　年会費　3,000 円

入会ご希望の方、ご寄付をお願いできる方は、下記東京事務所までご連絡いただければ幸いです。

特定非営利法人 ISAPH　東京事務所

〒 105-0004 東京都港区新橋 3-5-2

新橋 OWK ビル 3 階　NPO 法人 ISAPH

TEL 03-3593-0188　FAX 03-3593-0165

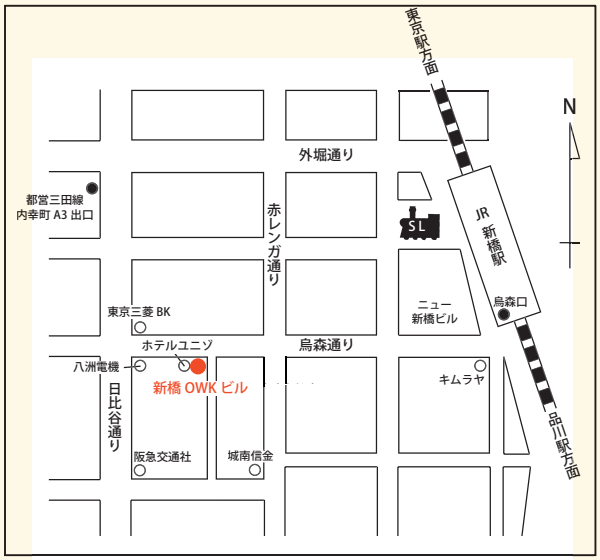
E-mail tokyojimusho@isaph.jp

URL http://isaph.jp/index.html

振込先

郵便振込　口座名　特定非営利活動法人 ISAPH

口座番号　00180-6-279925



ISAPH Newsletter 第 7 号　編集スタッフ
磯東一郎　槇村 さおり　中野博行